

一億総文筆家

大森 海太

少し前、日経新聞の文化欄で漢字学者の阿辻哲次という先生が書かれた記事が、面白かったのでご紹介する。

先生によると、以前の大多数の人は、学校を卒業したあと自分で文章を書くことがほとんどなかった。町内会で催し物の案内文を書くことなどですら、みんな逃げて回った時代であった。

ところがあるときからパソコンの急速な発達により手軽に打ち込むことが可能になり、今ではありふれた日常の体験を「ブログ」とやらにまとめたり、ちよつとした感想をネット上に発信する人が至るところにあふれ、「一億総文筆家」と呼んでも過言ではない時代になった。

また戦後は当用漢字が定められ漢字制限が実施されてきたのだが、ワープロの普及により潮流はくつがえされ、蹂躪や豊饒のように手書きではまず書けないような難しい言葉も簡単に使われるようになった。

ところが最近ではこれが行き過ぎて、躊躇う、蔓延る、彷徨く、戦慄く、狼狽える、周章てるなどという書き方が、雑誌やネット上の記事にときおり現れる。阿辻先生に言わせるとまったく迷惑な話で、巫山戯るのもいい加減にしてほしい、こんなことが将来の日本語表記に定着することを恐れると憤っておられる。

一億総文筆家時代と言われれば、わがOBペンクラブはなにやら時代の先端を行くようで、嬉しいような気もする。

いっぽう先生がお怒りの当て字フリガナの濫用については、確かにやり過ぎの感もあり、公文書や真面目な刊行物に使用されるのは慎まなければならないと思う。

でも何でも書こう会のように皆で楽しむ会では、たまにはイタズラで確信犯的に使ってみるのも、遊び心としては悪くはないんじゃないかなろうか。なにしろかの漱石先生だって、五月蠅い、八釜敷い、六づ箇敷いなどと、当時の状況はよく分からないが、さかんに当て字を楽しんでおられたようにお見受けするのである。